

令和元年度 学校関係者評価

山形大学附属小学校

※評価結果 4－よい 3－ややよい 2－やや悪い 1－悪い

項目	取り組み・自己評価・考察
<p>「よりよい自分に向かって歩み続ける子ども」が育つ教育課程の工夫と授業改善</p>	<p>【取り組み】</p> <p>① 学校の教育活動全体で進める道徳教育の充実 ② 「社会に開かれた教育課程の実現とめざす学年・学級カリキュラムの推進と改善 ③ 仲間・輪・和を広げる異学年交流活動(みのり班活動)、体験活動の推進と改善 ④ 視野を開く英語教育の充実</p> <p>【評価結果】 3</p> <p>【考察】</p> <ul style="list-style-type: none"> 「附属学校園で学び合う仲間『友だち』を大切にする子ども」を育てるために、校長が始業式・終業式や全校朝会の折に、児童と教職員に直接語りかけることにより、その後の様々な道徳的実践につながった。全校朝会で、校長講話「ことばのおくりもの」という話をしたところ、代表委員会で掲げた大テーマ「心あわせて みんなニコニコ附属小」の実現に向けて、室長会で「ここに大作戦」を企画し、心のこもった挨拶に取り組んだ。また、道徳教育推進教師が、全校朝会で、谷川俊太郎の絵本「ともだち」を学習材にした全校道徳を行ったり、友だちの良さを考えてほしいと、図書事務員が、図書室に「ともだち」コーナーを設けたりした。 学年主任を中心とするカリキュラム・マネジメント検討チームを組織し、タイム(総合的な学習の時間)と生活科を軸とした学年・学級カリキュラムづくりを推進した。毎週の学年会と学級便りを活用してカリキュラムのPDCAを行い、年度当初デザインした学年・学級カリキュラムを朱書きで更新しながら学級便りをファイリングしていく形で整理した。2月のカリキュラム研修会に向けて、ブロック部で学習プランの事前検討を重ねつつ、全員が資料「学習の創造」の執筆作業に取り組んだことで、学年・学級カリキュラムを通した子どもの育ちを振り返る良い機会となった。今後、教師集団が複数の目で子どもを洞察し、カリキュラムをもとに学年会等で情報共有しながら、子ども理解を深めつつ授業改善を図る必要がある。 学年フェスティバルの見直しを行い、各学年で発表時期や場所、対象を定め、生活科やタイムと他教科を関連させながら取り組んだ。これにより、体験に基づく探究サイクルの学習が充実し、プレゼンテーション能力を高める新たな取り組みも生まれた。4・5年生は、山形県の「郷土y a m a g a t a ふるさと探究コンテスト」にエントリーし、うち4年生の一班が1次審査を通過し、最終審査で発表した。学校教育目標の一つである「日本の子」の具現化に向けて、郷土愛を育む体験活動と学習成果の発表が2年生と3年生でも実施された。 今年度、英語教育コーディネータが主体となり、外国語ルームの整備、外国人との交流、海外の学校とのICT機器を活用した授業交流、小中連携によるCan-Doリストの作成等、外国語教育における新たな取り組みを県内外の先生方に発信することができた。

学校関係者の意見・提言

*取り組み①に関連して

- 道徳教育の充実について、校長が児童と教職員に直接語りかけることは、校長の意思と今までの経験を伝えることになり大変有意義なことと考えます。組織の長は方向性を示し、人を動かすことが仕事ですので、今後も継続して下さるようお願いいたします。
- 全校朝会が道徳教育の場として大切にされていることがわかります。とくに学校長の講話は、例えば「いじめ防止」など重要な課題について、全校児童に共通な感覚を持たせる意味で効果が期待されます。また、学校長の声は学校への信頼につながるものであり、表出することで「保護者の声」が聞こえてくるわけで、それに傾聴していけば「学校側の意思」との接合点が常に意識されてくるのではないかと思います。

*取り組み②に関連して

- カリキュラム・マネジメントの実践に「みる」という視点が貫かれています。「学習の創造」の執筆自体もやはり主眼は「みる」ことにあるのだと強く感じました。冒頭に、ソーシャライズされた自己の形成について引用されていますが、大切なことだと思います。なぜ、子どもたちは学校に行かなければならないのか。そこには、みんなで学ぶことの意味があると同時に、常に見つめ、見つめられている自分を意識することで自己が形成されていくという教育における相互作用の意味合いを感じたところでした。
- 附属小学校という存在をどうやって示していけるのか、他の学校では出来ないことをダイナミックに追求して行ってほしいと思います。
- 教員のそれぞれの創意工夫にあふれたカリキュラムが、展開されていることを感じます。
- 児童アンケートの中で、自分の成長を感じられない子が数%いました。授業を見ていても、他に圧倒されて、自分の意見を言えない子もいます。そういった子を先生が導き出し、発言できる場を作ってほしいです。
- 6月の探究型学習研修会について・・・持ち方の難しさを感じました。まずは、学生が9割以上を占める中での話し合いの持ち方です。そして、「探究型とはこれぞ」という師範だったのか、或いは「附属としての考え方」を聞いたかったのか、この研修会のめざすところです。指導計画が緻密になっている一方、「なぜ、それを題材にしてその活動なのか」これまで必要感や必然性とと言われてきた面が気になりました。

子どもにとってのリアリティーでしょうか。子どもとの距離が離れているものほど、その題材を教材や学習材にまで止揚していくための構成を大切にすべきと感じました。

道徳は、観るたびに進化を感じます。子どもたちの集中と追求を見ることができました。授業者の目線を下にした問いかけは、独自の指導法として確立してきたかのように見えます。いつも、子どもたちの「食いつき」のよさに驚いています。

- 11月の授業づくり研修会について・・・プレーストーミング的な話し合いがとても効果的になされていました。理科に参加したのですが、司会進行が常に授業の核心に沿ってなされ、また部が一丸となって取り組んだ様子が強く感じられる話し合いになりました。授業は、子どもをカオス状態に留めるうまさがあり、子どもの素直な感じ方が豊かで多様な言葉で表現されていました。いわゆる、まとめの言葉化を急がなかったことによって、「決め言葉」よりも「迷い言葉」が多く交わされ、とても楽しく、子どもの実感に沿った授業が展開されていました。

*取り組み③に関連して

- 山形で働く若者が減っている今、小学生の頃から、山形のよさにふれた今回の5年生の「探究フォーラム」はとても良かったです。山形のよさを小さい頃から感じていけば、大人になったら山形の為に何かしたいと思える大人になれると思います。
- 5年生の白鷹山登山など、個性的な取り組みがなされているように感じられます。こうした取り組みを続けていくには先生方のご負担も多かろうと思いますが、今後も個性的な活動を期待いたします。

*取り組み④に関連して

- 英語教育に関しては既に海外との交流を図っているようですので引き続きお願いします。今、世の中はグローバル化し、英語を話せるのが当たり前の時代になりつつあります。以前英語は大学受験までで、その後は必要に迫られ自ら勉強したものだけが英語力をつけてきました。英語力があれば広い世界に羽ばたくことができますので、ぜひ英語の楽しさを教えてくださるようお願いします。子供たちと同じ世代の外国人との交流なんかも好ましいと思われます。

※評価結果 4－よい 3－ややよい 2－やや悪い 1－悪い

項目	取り組み・自己評価・考察
児童個々の課題に応じた指導・支援の充実	<p>【取り組み】</p> <p>① まつなみ支援室を核とした子ども理解の共有・深化と「すべての子どもが安心して学ぶ」教育環境の充実</p> <p>② 特別支援コーディネータ、スクールカウンセラー、メンタルケアコーディネータの専門性を生かす個々に応じた切れ目のない支援</p> <p>③ 生徒指導の5つの場(自己決定・存在感・人間的ふれあい・相手との関わり・発達の可能性を最大限に発揮する場)を活かす教育活動の展開</p> <p>④ 業務の効率化による、個々の児童のより細やかな理解と対応を行える時間の創出</p> <p>【評価結果】 3</p> <p>【考察】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 担任一人で課題を抱え込むことのないよう、まつなみ支援室長を中心に学年・学校で組織的に対応することができた。一方で、学年を超えて全体で情報共有する場面・機会が不足していたと捉えている。この反省を受け、学校経営部会でそれぞれの学年で支援を必要としている児童について話題にあげ、これまでの経過や現在の様子、今後の対応等について、学年会で情報共有できるようにした。今後さらに、みのり班活動等ですべての教員が一貫した指導が行えるよう、校務ソフトを活用してパソコン画面で支援委員の記録を閲覧できるようするなど、情報共有を密にしている。 ・ 特支コーディネータ・支援員が独自の時間割をつくり、計画的に学級への支援や個別支援を行った。そこにスクールカウンセラーやスクールサポーター等も加わり、担任をサポートすることで、問題の未然防止・早期対応につながった。 ・ 学級や学年を超えて教員一人一人が全校児童の理解をさらに深めていくために、みのり班活動等の機会を捉え、生徒指導の5つの場(自己決定・存在感・人間的ふれあ

- い・相手との関わり・発達の可能性を最大限に発揮する場)をさらに意識して働きかける必要がある。
- 安定した学年・学級経営を行うための時間を確保できるよう、学校経営部会・学び創造部会・くらし創造部会の三部会において、教員一人一人が業務の効率化を図る視点を常に持ちながら企画・運営に当たる必要がある。

学校関係者の意見・提言

*取り組み①に関連して

- 附属の子どもたちには、違いを認め合うよさがあったと思います。それは、研究という役割の中で、目を離すことのできない子どもたちへの先生方のまなざしがあったからだと思います。授業参観させていただくたびに、今も異質や違いが取り上げられる時の柔らかさを先生方の指導に感じています。
- 授業参観で、子どもたち一人一人に対して配慮が行き渡っていることを感じました。
- 児童はそれぞれに能力を持っているものです。ただしそれを発揮できる時期などはバラバラなのでとかく対応が疎かになりがちです。その点まつまみ支援室を設置し、支援フォローしてくださるのは保護者にとりまして大変ありがたく、児童の将来に向けての可能性を引き出す準備となります。
- 支援に関する役割が重要性を増すたびにいろいろな役割が設けられてきました。それはいわゆるコーディネータとしての役割が期待されているわけで、あらゆる問題の解決が課されているわけではありません。そうした意味で、学年会などでの情報の共有化によって導いていくものだと思います。
- クラスの中には、少数でも様々な問題を抱えた子どもたちがいると思われまますので、授業や活動に積極的に参加していない(参加出来ない)子どもたちがいるとしたら、彼らが抱えている問題に目を背けず話を聴いてくれる先生でいてほしいと思います。
- 子ども自身が、いまだにテストの点数が通知表の評価につながっているため個性が発揮されていないです。

*取り組み②に関連して

- コーディネータ等が学校に配置されているのはとてもありがたいです。これからは、34人1人1人を1人の先生が見るのは大変。コーディネータの力を借りて、子どもたち1人1人の力をのばしていくようにしてほしいです。

*取り組み③に関連して

- 生徒指導の三機能というのもありました。子どもたちが人間として学んでいく土俵は、基本的として仲間と生活する教室であり、多くは授業の場であるという考えは今でも変わりません。わたしがお世話になり始めた頃は、「学習訓練」という言葉の「訓練」さえも忌み嫌うところがあり、共に学び合う学習の場に、人として生きていくための学びがあるのだと考えていました。
- 近頃は、守り重視。問題の未然化のための体制づくりばかりが取り上げられていますが、これからも、前に向いた攻めの生徒指導を基本に据えて、太陽の子・北国の子・日本の子を育てていただきたいです。

*取り組み④に関連して

- 業務改革の必要を感じています。若者の教職離れが危機的状況にさしかかっています。改革の一番は、若者が先生になりたいと思うような授業です。できれば、附属の新たな役割として、高校生のキャリア教育を模索するのも県の課題解決に寄与することかと考えます。
二番は、いろいろな行事の廃止や改編は、なかなか難しく苦しい作業でしょうか、今をチャンスとして勇気をもって進めていただきたいと思います。
三番は、先生方の仕事を増やさないことです。例えば、スポフェスでのテントの数、二人三脚でのサポーターなどの安全対策など、配慮することが随分と多くなっていることに気づきました。少し優しすぎかもしれません。何もない世の中はありません。いろんな事が起きるから社会であるという面もあるわけです。やりすぎると引っ込みはできなくなります。説明を尽くし、たよりなどで情報提供しているのですから、少々無理はお願いしていく勇気を期待します。
そうした意味合いにおいて、社会に開かれた教育課程を標榜する時代でもあるわけです。もっと保護者に任せたり協力していただいたりすることはないのか検討したいものです。そのための説明責任であり情報公開があるのだと思います。
- 授業以外の校務を見直し（例えば、発行している文書を減らす、ウェブの活用等）、先生方の時間的な余裕を確保出来るようにお願いします。

※評価結果 4－よい 3－ややよい 2－やや悪い 1－悪い

項目	取り組み・自己評価・考察
信頼される学級・学年・学校づくり	<p>【取り組み】</p> <p>① 4つの誓い「さわやかで元気なあいさつ」「話を目と耳と心で聴く」「小さな社会人として地域のお手本になる」「一日一善」を常に意識した実践活動の展開</p> <p>② 適時・適切な記録と情報発信(※附小デジタルアーカイブの検討・立ち上げ)</p> <p>③ 保護者及び学校評議員等の学校評価を生かす経営改善</p> <p>④ 保護者の教育力を活かし高める研修会等の計画・運営</p> <p>【評価結果】 3</p> <p>【考察】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 校内での挨拶や廊下歩行、校外でのバスの乗車や登下校の際に、4つの誓いがさらに生かされる方策を改めて検討する必要がある。また、保護者の理解と協力を得ながら、具体的に実践・評価・分析・改善する場面を設け、年間を通して取り組む必要がある。 ・ 毎週の学級だより等で、子どもや保護者に、その子の良さや成長を積極的に伝えており、十分な情報発信ができています。また、ホームページを活用し、学校生活の様子や始業式・終業式の代表児童のこたばの掲載、入選の合格者番号の発表などを行い、確実に情報関係の改善が図られている。今後さらに、事務補佐員等の協力を得てアーカイブの効果的な運用を進めていく必要がある。 ・ 学校評価の全面見直しを図った。まず、学校教育目標について、児童のアンケートと関連づけた項目で自己評価を実施することにより、教育活動の自己点検を行った。次に、児童のアンケートと比較した自己評価結果を公表しつつ、保護者のアンケートにより満足度を調査し、数値化したり、教育活動への感想・意見・要望等を集約したりすることで、保護者の思いを真摯に受け止めるとともに、来年度の教育課程

編成に生かすことができた。さらに、今年度の経営の重点がどれだけ達成されたか、教職員による学校運営評価を実施することにより、次年度の教育活動や学校経営に生かしていくとともに、学校評議員会より助言を得ることで、開かれた学校づくりの推進につなげることができた。

- ・ 保護者の研修会は、現在、PTA研修部が主体になって進めており、平日に独立した開催となっている。今年度は、山形警察署の金澤氏をお招きし、「子どもをインターネットやスマホ等の被害から守るために」という演題で講演いただいた。また、学校が主体となり、1年生の保護者を対象にした子育て学習会も昨年度から行っており、今年度は、酒田市の後藤助産師をお招きした。来年度は、PTAレクリエーション大会を見直し、授業参観や懇談会など同日開催の研修会等を実施することで、保護者と教員が共に子どもの育ちについて考える機会にしたい。

学校関係者の意見・提言

*取り組み①に関連して

- 「さわやかで元気なあいさつ」の重要性は社会人の中堅になってやっと自覚できる場所です。あいさつは相手に心を開くはじめの一步ですが、自ら進んではいることは勇気のいることです。昔は児童からあいさつすることと言われましたが、今は先生方からあいさつされ大変結構なことと思っております。
- 前へ進める評価にしていくためにも、4つの誓いなど具体的な項目での評価がよろしいと思います。訪問した際に、子どもたちの挨拶がとても気持ちの良いものになっていることに気づいていました。
- 保護者がルールを守っていません。路上駐車をしての送迎。授業参観日の時の駐車も、コンビニやドラッグストアなどに止めている、といったようにルールを守れない大人が多く見られます。それに伴って子どももルールが守れません。平気で歩きながらの携帯など、危ないです。

*取り組み②に関連して

- 附属小学校が「誇りと自慢の学校」であることが他にも伝わる情報発信でありたいものです。また、地域から「愛される学校」であるためにも、とりわけバス通学など「小さな社会人」としての振る舞いができる子どもたちへの指導も間断なく続けていくことが大事になりますね。
- 保護者と教育観を共有できればと思います。例えば、「自己は他によって際立つ」、「オレオレしない他への気遣い」、「正義と勇気が通る仲間づくり」など、大切にしたい教育観を、学年だよりで事例的に伝えたり、懇談会などで話題にしたりすることで共通感覚が生まれるのではないのでしょうか。お世話になった先輩の学年主任たちは、それぞれ輪郭のはっきりした教育観をいつも口にしていましたし、保護者の理解と支援を得ていたように思います。
- 年々、参観日の日数が減り、学校での様子は、担任が金曜日に発行する学級だよりでしか、分からなくなってきました。「働き方改革」も騒がれている中で、作成するのは大変だと思いますが、「学校での様子」が分かるような学級だよりをお願いしたいです。

*取り組み③に関連して

- 学校経営に目的は、「すべての子どもと教職員が『安心』と『生き甲斐』を感じられる学校をつくる事」。私がネットトヨタ山形を経営する目的も、「社員の仲間と家族の皆さん

の笑顔と幸せ」であり、チームネッツプロミス（会社と社長の約束）として、「『山形一人の人が輝き、人が育つ風土』を創り上げ、社員の仲間と家族の皆さんの幸せを守ります。」と伝えています。学校関係者評価記入用紙の考察から、学校経営の目的を実現するための取組みが大変具体的であり、素晴らしいと思いました。

- 教職員による自己評価と児童アンケート、保護者アンケートで重要なのは、「あまり達成されていない」「ほとんど達成されていない」や「あまり思わない」「まったく思わない」「ぜんぜんそう思わない」であり、そのアンケートについて深掘りする必要があると思います。
- 保護者が学校に対して前向きな評価をしてくださっている方が多い中で、マイナスの評価をしている保護者もいます。その評価をどう受け止めていくか。前向きな評価をしてくださっている中にも、学校に質問したいこと、疑問に思っていることはあるはずで、逆に、もっと良くなってほしいという思いで、マイナスの評価をなさっている方もいらっしゃるでしょう。トータルの評価だけですべてを判断するのではなく、保護者と忌憚なく話せる場もあっても良いのではないのでしょうか。
- 学校と保護者の信頼関係をさらに築いていってほしいです。保護者の中には先生に相談しても解決できなかったという話を聞きます。コーディネータ等の力を借りてでも、解決する方に進んでもらいたいです。
- 学校関係者の範囲を、教職員、児童、保護者だけにするのではなく、もっと広げ（例えば、ガードマン、バスの運転手、バス停前の損保会社、近隣住民）、声を聴く事が大切だと思います。

*取り組み④に関連して

- 保護者はどうしても「自分の子」というところから入ってしまうので、大きな視点で物事を見る目を養ってもらいたいところです。それがひいては教育の哲学を作っていくことになります。是非今後とも保護者への研修会を継続されますようお願いいたします。
- 児童の生活スタイルは多様ですので、学校の責任範囲内だけではなかなか実現の難しいこともあろうかと思えます。先生方の働き方が変わるのと同様に PTA 組織もより現実的な形に変わっていく必要があります。家庭と学校のバランスがよりよくなるのが大切かと思えます。

*その他に関して

- 附属は、「理想とする教育理念を実現する府」でありたい、信頼は、気遣うことより前へ進むことで得ていきたいものです。
- 学童関連では建物の老朽化等の問題について聞いていますが、代替の物件をさがすにも学童・学校だけでは困難が予想されるので、同窓会組織などにも協力を要請する必要があると思います。